

ドバイの空は砂の中

— 建物を建てることのむつかしさ —

依頼主の好奇心をどこまで予測できるか

ドバイTOTOショールームの横の、砂で煤けた空気を破って、突然、目にあまる大型の飛行機が現れ、続いて爆音が鳴り響いた。こんな低空で街中を飛行するのが許されていることには、驚きを超えて、疑いも起こらず、何となく自然に胸に落ちたドバイに吹く風であった。

PESが、2006年からニューヨークで、Lehr associates の、Daniel Lehrの下で、基本設計に参加していたドバイプロジェクトの現地ドバイでの全体会議には施主側の「ナキール」以下、イギリス、オーストラリア、ドイツ、アメリカ、日本と、国籍の異なる建設設計関係者が集まっていた。「トールタワー」のと呼ばれたプロジェクトは、当初は、800mから始まり、1000m、1200mと計画が進むにつれて、建物の高さが、次第にエスカレートして増えていった。PES Internationalの分担する設備設計には29階毎に設けられ、避難階にもなる機械室の換気システムであった。外気温度が50度を超える気候区で、西側に祈りのための開口部を有するイスラムの世界の建物で、生存のための一定の換気量を常時確保するためには、種々の問題点を克服する必要があった。技術的な分析を伴う、創意工夫が求められた。実務レベルの設計作業以前に、いくつかの仮説に基づくシミュレーションが必要不可欠であった。3年間の基本設計を経て、このプロジェクトは実現に至らなかった。

PES Internationalがニューヨークで設備設計に参加したペイ事務所（PEI、Partnership Architects）設計のジュベリアリプロジェクトは29階、4棟の建物群で、その現場を工事中の大成建設の案内で訪問することができた。その建物には、TOTO製品が採用されており、直ぐ横にTOTOドバイ事務所があり、ドバイでのプレゼンテーションを紹介された。TOTO社の環境コンサルタントとしてのPESにとって、現地でのマーケティングの参考になった。同行した日大教授の早川真先生と共に現場責任者とも会話ができて有意義な時間を過ごした。

トラックの上に駱駝が乗って運ばれる風景や、月のない夜は本当に真っ暗闇、月のある夜はその明るさを味わうと、月の砂漠を語る大成建設の人、異郷で活躍する人達に敬意を表する気持ちになった。

